

息がつまる話

野瀬 隆平

ホテルでの二泊は快適であった。別府の丘の上に建つホテルは、まだ新しく設備は整っているしスタッフのサービスも申し分ない。

しかし何か落ち着かない。コロナのせいである。館内のどこに行くにもマスクをしなければならない。他の宿泊客とほとんど顔をあわせないような所でも、マスク着用を厳密に守らなければならないのだ。

温泉場にあるホテルなので、立派な露天風呂付きの浴場がある。一風呂浴びようと部屋で浴衣に着替え廊下に出た途端、マスクをするのを忘れていたことに気づき、あわてて鍵を開けて舞い戻るはめとなる。

風呂場の脱衣所でもマスクをせよとある。浴衣を脱ぎ捨てて浴室へと急ぐ。湯船につかる前にシャワーを浴びようと、顔に手をやるとマスクをしたままではないか。あわてて脱衣所にもどりマスクをロッカーに入れる。風呂に入るにも、のんびりとしていられない。かような緊張を強いられるのだ。

朝食の場でも同じだ。レストランの入り口でスタッフが迎えてくれるが、お互いにマスクをしている。テーブルに注文をとりに来る女性も、顔の半分しか見えない。まるでアラブの女のようなようだ。

メニューに含まれていない料理をお好みで選んで食べることができる。ビュッフェ・スタイルだ。料理が並んでいるコーナーに行くのもマスクを付けたままであるのは当然として、料理を取る tong も素手で使っては駄目。薄いビニールの手袋が用意されており、各自がそれを両手にはめて料理を皿に取る事となる。最もコロナに感染しやすい場所であることは解るが、これではまるで外科医が手術をする時の姿だ。

テーブルに戻り、やっと食べ始める段になって初めてマスクを外す。やれやれと、少々疲れを憶える。これまでに無い経験である。

部屋に戻りテラスに出ると、別府湾を背景に街のあちこちから湯けむりの立ち昇る眺望が広がっている。胸いっぱい空気を吸い込むと、かすかに硫黄の匂いがした。やはり温泉付きのホテルは良い。